



昭和28年の歌会始、御題『船出』：戦後の変遷と宮内庁宮内公文書館所蔵資料を視座にして（特集・神戸からブラジルへ：過程と着後の記録・文学）

木谷，真紀子

(Citation)

海港都市研究, 15:61-78

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012002>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012002>



昭和 28 年の歌会始、御題『船出』

——戦後の変遷と宮内庁宮内公文書館所蔵資料を視座にして——

木谷 真紀子

(KITANI, Makiko)

I はじめに

本稿は、宮内庁宮内公文書館所蔵の貴重資料から、昭和 28 (1953) 年の歌会始に詠進された和歌を分析し、特に海外在住の日本人移民の歌や、移民が詠まれた歌を、宮内庁宮内公文書館所蔵資料から明らかにすることを目的としている。

昭和 28 年の歌会始には、他の年とは異なった特徴が主に 3 点ある。まず、2 年ぶりの歌会始であったことだ。昭和天皇の母、貞明皇后が 26 年 5 月 17 日に逝去し¹、1 年間は服喪期間にあったため、27 年の歌会始を含む数々の行事が開催されていなかった²。

次に、皇太子（現上皇）の歌が初めて発表された歌会始でもある。皇太子は 26 年 12 月 23 日に成年していたが、服喪期間であったため、立太子礼、成年式が延期、歌会始も取り止めだったので、28 年の歌会始が初めての参加だった。

3 点めは、直前になって延期したことだ。27 年 9 月 30 日、28 年の歌会始の詠進方法が発表され³、12 月 22 日には 1 月 14 日に開催されることが報じられる⁴。しかし年明けすぐの 1 月 4 日、昭和天皇の弟・秩父宮が逝去した。宮内庁宮内公文書館に所蔵された資料を確認すると、式部官長、儀式課長名で、歌会始と講書始の延期の立案書が 1 月 5 日付で挙

¹ 逝去後、6 月 7 日に貞明皇后と追号された。

² 「朝日新聞」が「宮中では喪中のため明年一月の新年行事は行われず、さきに発表された歌会始の御題『小鳥』の詠進も受付けないことになった」（「歌会始の詠進取止め」『朝日新聞』昭 26・10・20）としたほか、各紙で歌会始の取り止めが報道されている。

³ 「歌会始御題『船出』の詠進方法が次のように決定、三十日宮内庁から発表された。例年と異なる点は詠進の締め切りが幾分早まり、したがって歌会始も例年の一月下旬か上旬または中旬になる予定である」と「毎日新聞」は 9 月 30 日付夕刊で、「朝日新聞」「読売新聞」は 10 月 1 日の朝刊で報道している。

⁴ 「はじめて国事となった新年祝賀の儀をはじめ講書始、歌会始など宮中の新年行事は次のごとく決定、廿二日、宮内庁から発表された」（「宮中の新年行事 祝賀の儀、講書始など本極り」『夕刊 読売新聞』昭 26・12・22）として 1 月 14 日の開催が掲載されている。

げられている⁵。さらに 16 日には同じく式部官長、儀式課長名で、「講書始を 2 月 3 日、歌会始を二月五日」⁶に実施する立案書が出され、19 日に決済、20 日に一般に向けて発表された⁷。

以上 3 点は「歌会始」の歴史における 28 年の歌会始の特別性であるが、前年である 27 (1952) 年が日本史上において特別な年であったのは改めて述べるまでもないだろう。26 (1951) 年、連合国 48 か国と日本が署名、調印した第 2 次世界大戦を終了させる平和条約が 52 年 4 月 28 日に発効、これに伴って日本は独立国となり、日本と上記国家との国交が回復したからだ⁸。

外国との関わりは別の形でも復活する。27 年 1 月、ブラジルへの日本人移民が「正式承認」⁹され、紆余曲折を経て 12 月によりやく第 1 陣がブラジルへと出発したからである¹⁰。

このように、皇族の相次ぐ逝去と皇太子の成年、さらに独立によって諸外国との国交が回復したという、日本にとって歴史的な変化が起きた翌年に開催されたのが 28 年の歌会始であった。御題は「船出」である。御題の決定までの背景や由来は明らかにされていないが、当時は「独立して初めて開催される歌会始の御題は『船出』と決定した¹¹」と「独立」と関連づける報道もあった。つまり、例年とは異なり、当時の日本の状況との深い関連性を感じさせる御題だったのである。

本稿では、まず歌会始が戦後どのような変遷を辿ったか、昭和 28 年までの流れを確認する。次に、海外からの詠進や米国の日本人移民が和歌にどのように接していたかを示す。最後に宮内庁宮内公文書館に所蔵されている貴重資料によって選歌 15 首の選考の過程を確認し、主に外国との関わりを詠んだ歌から、昭和 28 年という〈時代〉が、一般の国民によってどのように表現されたか、またどのように表れているかを考察したい。

⁵ 宮内公文書館所蔵の「昭和二十八年 儀式録」には「来る一月十四日行わせられる講書始及び一月十四日行わせられる歌会始は、ご延期あらせられてよいか伺います」との文書がある。

⁶ 宮内公文書館所蔵「歌会始録 昭和二十八～三十年」に「講書始及び歌会始は御延期中のところ左の通り行わせられてよいか伺います」として本文中の日程が挙げられている。

⁷ 「夕刊 読売新聞」では昭和 28 年 1 月 20 日付で「歌会始の儀 来月五日と決まる」と報じられているが、「朝日新聞」は前日の 2 月 4 日になって「あす歌会始」という記事を掲載している。

⁸ 『『分裂社会党』どこへ行く？ 講和・安保条約批准をめぐる』（講談社編『昭和二万日の全記録 第 9 巻 独立—冷戦の谷間で 昭和 25—27 年』平元・5・20、講談社）、192 頁。

⁹ 無署名「ブラジルへの移民が正式承認」（「朝日新聞」昭 27・1・22）

¹⁰ 無署名「ブラジルへ 第一陣十八家族が出発」（「朝日新聞」昭 27・12・27）

¹¹ 無署名「御題『船出』 来年の歌会始」（「読売新聞」昭 27・6・10）

Ⅱ 「歌会始」の変遷～昭和 28 年まで～

『日本国語大辞典』は、「歌会始」について、以下のように詳しく説明している。

宮中で行なわれる新年最初の歌会。歌人が集まり歌を作り、これを披講する。読師、講師がおり、講師がその歌を読みあげたのち、詠吟唱和することもある。明治 5 年 (1872) 勅使官、判仕官のうち歌道に心がけのある者に対して詠進を許し、同年国民一般からの詠進を許す旨の布達を各府県あてに発した¹²。

「歌会始」の歴史については、「鎌倉時代中期の亀山天皇の文永 4 年 (1267 年) の正月 15 日に内裏御会始を行っている」記録があり、「当時はまだ恒例の行事ではない」ものの、「室町時代中後期から正月の 18 日か 19 日に開いた例が多い。江戸時代前期に入ると (略) 正月の 24 日が定例となってい」た¹³。『皇室事典』では、近代における変化を以下のようにまとめている。

江戸時代末に中断していたが、明治 2 (1869) 年に復興された。その上、明治天皇の勅めにより、同 7 (1874) 年から一般国民にも詠進が認められた。明治 12 (1879) 年から預選歌 (選抜秀歌) が歌御会始で披講されることになり、同 15 (1882) 年から、御製をはじめ預選歌まで新聞に発表されている。

その選者も披講 (古式の朗詠) の諸役も、明治 2 年から歌道御用掛^{かどうごようがかり}、やがて同 21 (1888) 年から宮内省御歌所の人々が奉仕してきた。また大正 15 (1926) 年公布の「皇室儀制令」により、名称を「歌会始」と改め、その「付式」で儀式次第を詳しく定めている¹⁴。

しかし戦後、歌会始そのものが大きく変化した。まずは 21 年 4 月、これまで歌会始や宮中の和歌に関する業務を執り行っていた御歌所が廃止され、それに伴って「御題は従来

¹² 日本国語大辞典 第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部 編『日本国語大辞典 第二版』平 13・1・20、小学館)

¹³ 所「和歌の勅撰と歌会始」「歌会の来歴」(皇室事典編集委員会『皇室事典』平 21・4・30、角川学芸出版)、498 頁。和暦と西暦の年に齟齬があるものに関しては、宮内庁ホームページ「歌会始」で確認した。<http://www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/utakai.html> (令 2・1・1 閲覧)

¹⁴ 所「歌会始と披講」「歌会の来歴」(前掲『皇室事典』)、498～499 頁

の漢詩的な御歌所風のものから、簡明なやまとことば風にな¹⁵った。宮内庁ホームページには、御歌所が廃止された昭和 22 年以降の歌会始の御題、皇族や選者の歌、23 年以降は選歌も掲載されている¹⁶が、それ以前の御題を新聞で確認すると、17 年「連峯雲」¹⁷、18 年「農村新年」¹⁸、19 年「海上日出」¹⁹、20 年「社頭寒梅」²⁰、21 年「松上雪」²¹であった。そして御歌所廃止後は、22 年「あけぼの」、23 年「春山」、24 年「朝雪」であり、大きく変化したことが分かる²²。

当然ながら選歌を決める「選者」も変化した。22 年の歌会始の御題を発表する記事では「今までは詠進歌の選には御歌所歌人が負っていたが、今回は特に佐佐木信綱、斎藤茂吉、窪田空穂の 3 氏が御歌所歌人の千葉胤明、鳥野幸次とともにも選者を仰せ付けられた」²³と報道されている。この民間の 3 人については、結社や系譜などに配慮の感じられる人選²⁴となっており、竹柏会、心の花系では佐佐木信綱、アララギ系では斎藤茂吉が選者を務めた。天皇は選者や選者助手との時間を持ち、歌会始の翌日、佐佐木と鳥野から「選歌選定等についての奏上をお聞き」になったうえで、歌会始選者助手の「6 名に謁を賜い、慰労のお言葉を賜」わっている²⁵。

歌会始の〈変化〉には、期待が込められていたようだ。翌 23 年 1 月 18 日付「朝日新聞」の「天声人語」には、御歌所や選者、また歌会始に対する想いが綴られた。

伊藤左千夫は当時の御歌所の歌風をこきおろして『高崎正風などの歌は歌ではない。陛下のほうがよほどお上手だ。しかしもつと歌の真髓をお知らせしたい』と言いつつその機を得なかった。(略) 御歌所も終戦後取潰しで選者制になった。香川景樹の流れをくむ桂園派のいわゆる宮廷歌人しか寄人になれなかったものだが、今年は鳥野幸次氏のほか斎藤茂吉、窪田空穂、吉井勇、川田順氏ら新顔が選者の多数を占めた。宮廷にはよ

¹⁵ 「昭和二十三年一月二十九日」(宮内庁『昭和天皇実録 十巻』平 29・3・30、東京書籍)、717～718 頁。

¹⁶ 「お題一覧 (昭和 22 年から)」宮内庁ホームページ www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/odai.html (令 2・1・1 閲覧)

¹⁷ 無署名「御題 連峯雲」(「朝日新聞」昭 16・10・23)

¹⁸ 無署名「御製に拝す大御心 農村新年」(「朝日新聞」昭 18・1・29)

¹⁹ 無署名「御題 海上日出 皇国の使命御垂示」(「朝日新聞」昭 18・10・24)

²⁰ 無署名「畏し・御製を賜はる 宮中歌御会始の御儀 社頭寒梅」(「朝日新聞」昭 20・1・23)

²¹ 無署名「勅題 松上雪」(「朝日新聞」昭 20・10・23)

²² 昭和 22 年以降は注 12「宮内庁ホームページ」で確認。

²³ 無署名「あけぼの 新春の御題」(「朝日新聞」昭 21・10・12)

²⁴ 内野光子氏は『短歌と天皇制』(平 1・10・10、風媒社)所収、「(5) 歌会始選者の系譜」で、昭和二十二年以降六十四年までの選者を、結社や系譜ごとに表にまとめ、「配慮」について言及している。206 頁。

²⁵ 「昭和二十二年一月二十七日」(注 16『昭和天皇実録 第十巻』)、277 頁。

うやく新しい民衆の歌ごえがひびくのだろうか²⁶。

執筆した記者が御歌所歌人の歌の質自体を疑問視していたこと、一つの派のみが権威を持っていたことに対して疑問を抱いていたのが窺える。

記者がこのように記した背景には、明治の末にさかのぼるものの、御歌所において「歌会始選歌における情実や金銭にまつわる不正は日常化し」²⁷ていた過去があったからだと考えられる。明治 44 (1911) 年の歌会始の記事では、皇族の歌や選歌が掲載されているすぐ下に「数万首の歌の選抜につきては年久しく苦々しさとが^{わだかま}蟠って積弊の極まるところ今や看過するにしのびざるものあり」とある²⁸。この後「東京朝日新聞」上では「御歌所の腐敗の実態と改革の要を説くキャンペーンが展開され²⁹」、結局、衆議院で質問されるまでに至った³⁰。「二寄人戒飭³¹」によって一応の解決をみたものの、先の「天声人語」は、御歌所や歌会始に対する根強い不信感あったことを感じさせる。言い換えれば、御歌所の廃止や民間の歌人が選者となったことで、「民衆のうたごえがひびく」³²歌会始になるという新鮮な印象を与え、期待を抱かせたのであろう。

その 23 年に催された「歌会始」の御題は「春山」であった。「天皇・皇后御同列で出御されることに改め」られただけでなく、これまで全て御歌所が担当していた業務の担当について、儀式が「式部寮の主管」、「詠進歌の選者会議及び編集に関する事務手続き等」に関しては、昨年 9 月 15 日に設置された歌会始詠進歌委員会、「賜物及び発表関係等」については総務課が取り扱うことと新しく定められた³³。前年同様、天皇は歌会始の翌日に選者から「選歌の状況についてお聞きにな」ったあと、選者助手を務めた 4 名の「拝謁を受けられ」ている³⁴。翌日の「時事通信」の報道には「預選者が参内³⁵」という見出しが付されたほか、「朝日新聞」も「詠進者とご会見 歌会始 異彩、外人から英詩」と歌

²⁶ 無署名「天声人語」(「朝日新聞」昭 23・1・18)

²⁷ 前掲注 24『短歌と天皇制』(177 頁)

²⁸ 無署名「詠進歌選抜の内幕」(「朝日新聞」明 44・1・19)

²⁹ 注 27 に同じ。内野氏は、1 月 26、27、29 日の 3 日を挙げているが、実際は歌会始について報じる 1 月 19 日から、「二寄人が戒飭」(注 31)される 2 月 10 日まで続いている。

³⁰ 「御歌所の腐敗」(「東京朝日新聞」明 44・1・31)で、「衆議院に於いて島田三郎の質問中、宮内官吏失行の為め累を皇室に及ぼすことのある事実を挙げて当局者の猛省を求めた」とある。

³¹ 無署名「二寄人戒飭せらる 内規違反、選歌の陋計」(「東京朝日新聞」明 44・2・10)

³² 注 26 に同じ。

³³ 「昭和二十五年一月二十四日」(『昭和天皇実録 十一巻』平 29・3・30、東京書籍) 14 頁。

³⁴ 「昭和二十二年一月三十日」(注 16『昭和天皇実録 第十巻』)、612 頁。

³⁵ 無署名「預選者が参内 在留邦人も詠進す」(「時事通信」昭 23・1・30)

会始に预选赛の参加が許されたことを報じた³⁶。選者や選者助手のみではなく、一般の国民が参内し、報道されたことで、国民にとって身近な歌会始との印象が強くなったのではないだろうか。

翌 24 年の「歌会始」に関しては、御題が発表されるまでの経緯が他の年よりも明らかになっている。23 年 10 月 19 日に「詠進歌委員長代理の同委員入江相政^傳_從」から「(翌 24 年の一引用者注) 御題につき奉伺を受けられ『朝雪』にお決めになる」、20 日には「尾上八郎^榮_舟・斎藤茂吉・窪田通治^空_穂・吉井勇・鳥野孝次に詠進歌選者を仰せ付けられる」との記録がある³⁷。年明けて 1 月 28 日の歌会始の翌日には「選者 5 人の拝謁を皇后と共に受けになり、選歌につきそれぞれの言上をお聞きになる。ついで選者助手上松寿樹以下 3 名の拝謁をお受けにな³⁸」ったとあり、天皇が戦後初めて選者全員と面会したのが分かる。さらに 25 年は終了後に「尾上・吉井・折口」という選者だけではなく「预选赛 12 名の拝謁を受けられ、お言葉を賜³⁹」わった。

以上のように歌会始の戦後の変遷を確認すると、御歌所の廃止で御題がやまとことばへと、また選者が民間の歌人へと変わり、その選者が選考の過程や選歌について天皇に説明するようになった。詠進する国民の参加が許され、さらに歌会始の終了後にも、天皇に面会する時間が設けられたことから、天皇も歌会始を通して国民に積極的に関わったと言える。同時に天皇が、直接、選者や歌を詠んだ応募者と関わることで、不正や癒着などが起こりにくい環境が調えられたといえ、国民にとってより身近な行事になったと考えられるのではないだろうか。要するに「歌会始」の目的は、もはや天皇への詠進ではなく、御題で詠んだ和歌に「天声人語」が表現するところの「民衆のうたごえ⁴⁰」が反映されること、つまり和歌を詠進した者たちが率直に想いを表現し、それが評価の対象となる基盤が調ったといえるだろう。

次なる大きな変化は、26 年の歌会始から、御題の発表日が 1 年前、つまり 25 年の歌会始当日に早められたことだ。その理由について、宮内庁宮内公文書館に以下のような談話が残されている。

本日明年の歌会始御題を「朝空」と仰せいだされました。従来御題はいつも 10 月下旬頃

³⁶ 無署名「詠進者とご会見 歌会始 異彩、外人から英詩」（「朝日新聞」昭 23・1・30）

³⁷ 「昭和二十三年一月二十九日」（前掲注 16『昭和天皇実録 十巻』）717～718 頁。

³⁸ 前掲注 16『昭和天皇実録 十巻』、766 頁。

³⁹ 「昭和二十五年一月二十四日」（『昭和天皇実録 十一巻』平 29・3・30、東京書籍）14 頁。

⁴⁰ 注 26 に同じ。

仰せいだされたのでありますが、御題によっては詠進の締め切り日までの間には、直接経験することなく歌を詠まなければならぬということもあって、詠進するに困難を感じられた向きもあるやに聞き及びました。依って本年よりは従来方法を改め、年頭にあたり明年の御題を発表することをお願いしました処、本日仰せいだされたのであります。各位はこの 1 年の間に機会を見て詠んでおき、詠進要項の発表後、宮内庁に差し出されるようにして貰いたいと思います。

尚此の際併せて申し述べておきますが、詠進歌は預選にならなくても、全部都道府県別に綴ちて 3 陛下の御手許に差し上げ御覧を頂くものでありますから、1 人でも多くの人が詠進されるよう希望してやみません⁴¹。

天皇の発案ではないとは言え、詠進する側に配慮して慣例を改めたこと、さらには天皇が詠進歌を見ていることを強調し、詠進歌が増加することを望む気持ちが残されている。

しかし御題の決定が早められたことで、その 1 年の間に起きた出来事や、それによる天皇の心情を反映した御題にすることは不可能となった。もちろん、平成の天皇の退位のように、1 年前の時点で定められている場合は、それを前提とした御題にすることができる。つまり想定される〈未来〉か、歌会始が実施される 1 年以上前の〈過去〉に基づいての御題であるのだ。

26 年の歌会始では、翌年の御題が「小鳥」と発表されたが⁴²、先述のように貞明皇后が逝去し、歌会始は実施されず、御題「小鳥」の詠進も受付られなかった。その服喪期間中に日本が独立したのは先述の通りであり、喪があげた約 2 週間後、独立から 1 ヶ月半後の 6 月 1 日、28 年の歌会始の御題が「船出」と決定するのである。

Ⅲ 歌会始への海外からの詠進

昭和 27 年以降、歌会始が取り止めとなったのは昭和天皇逝去の直後の平成元年のみである。翌 2 年は、「昭和天皇を偲ぶ歌会」との形式で行われ⁴³、前年の歌会始の御題「晴」で詠まれた昭和天皇、平成の天皇、皇族の歌、さらには前年の歌会始のために選ばれた入

⁴¹ 宮内公文書館所蔵、松平歌会始詠進歌委員会委員長談話。

⁴² 無署名「来年の御題 『小鳥』」（「朝日新聞」昭 26・1・27）

⁴³ 無署名「平成 2 年」（昭和天皇を偲ぶ歌会）宮内庁ホームページより。

選の10首と佳作の13首が読み上げられた⁴⁴。もちろん、昭和天皇が逝去したのは全ての準備が調った歌会始の直前であった⁴⁵ことが大きいであろうが、昭和28年においても、27年のための御題「小鳥」がそのまま使われることも可能だったと考えられるのではないだろうか。

国内の新聞が、御題「船出」を、日本の独立と結びつけて報道していたのは先述の通りだが、1903年、米国ロサンゼルスで発刊された邦字新聞「羅府新報」では御題「船出」を「終戦後6年漸く独立後の第1年を迎える日本の姿を象徴し『船出』と決められたものであった」⁴⁶と報じている。しかし、宮内庁宮内公文書館所蔵の「歌会始録」「儀式録」でも日本の独立が御題「船出」の由来となったという文書は存在しなかった。換言すれば、誰もが〈独立〉を想起するほど、28年の御題「船出」は時代を象徴的に示すものだったのだろう。

高知県	福岡県	大分県	佐賀県	熊本県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	海外	遠東	海外
八十五	二百六十八	九十九	八十五	百六十三	百四十五	百六十六	百六十六	百六十六	百六十六	百六十六

【図1】昭和25年の詠進歌応募の記録

(宮内庁宮内公文書館所蔵「自昭和23年 至昭和26年 歌会始録」)

最初に述べたように、28年の歌会始は2年ぶりかつ皇太子が初めて参加するという特別性があった。

しかし、詠進歌数は5762首と、戦後から現在まで最も少ない。

宮内庁宮内公文書館所蔵の御歌所廃止後の23年から26年、28年から31年の「歌会始録」には、都道府県別の詠進歌数(図1)、「儀式録」には預選者への下賜品、選者の交通費など様々な記録が残されている。同資料から、全詠進歌数と海外からの詠進歌数のみ、下の表1にまとめた。

⁴⁴ 無署名「古式にのっとり『晴』歌う 昭和天皇を偲ぶ歌会」(「朝日新聞 夕刊」平2・2・6)

⁴⁵ 「講書始と歌会始中止」(「朝日新聞」昭64・1・7)で、「新年の宮中行事、講書始(予定では10日)と歌会始(同12日)を中止することを決めた」と報道されている。昭和天皇の崩御は歌会始予定日のわずか5日前であった。

⁴⁶ 無署名「来年の御題は『船出』」(「羅府新報」昭27・6・10)

28 年の詠進歌数が特別少なかった理由として、上記のように御題の発表が 6 月と変則的であったこと、詠進方法が発表されたのが 9 月 30 日、締め切りが 11 月 1 日と募集期間が短かったことなどが考えられる⁴⁷。しかしこの年だけではなく、その後 4 年間も、詠進歌数は 1 万首を下回ったため、内野光子は、この 5 年間の「低迷の時期」を、戦後の「第 2 期としてとらえたい⁴⁸」としている。一方、海外からの詠進は 26 年まで順調に増加し、28、29 年の全詠進歌数が特別少ない中でも一定の応募数を保っていたのが分かる。

〔表 1〕昭和 28 年前後の歌会始の詠進歌数

昭和	御題	全詠進歌数	海外からの詠進歌数
23	春山	10904	34
24	朝雪	11899	58
25	若草	10506	94
26	朝空	12422	117
28	船出	5762	81
29	林	6364	99

ここで、海外からの詠進の状況について振り返りたい。23 年の歌会始に関する記事では以下のような記述がある。

勅題『春山（はるのやま）』についてひろく一般から詠進された歌は 1 万 900 余種、この中には、アメリカ、ハワイ、メキシコ、ブラジル、中華など海外同胞からのもの 34 首を含み、さらに遠く故山の春に思いを寄せた在留地からの歌もあった⁴⁹。

抑留者や、移民として世界各国に渡った邦人から詠進があったことが分かるが、24 年には、米国の日本人移民の和歌が入選し、その後連続して 25、26、28 年と選歌になっている。

戦後、2 世を含む米国の日本人移民が、米国でどのように和歌を学び、「歌会始」という行事にどのように関わったかを明らかにする研究は管見に入らなかったため、「羅府新報」を調査した。同紙は毎週、文芸欄を設け、俳句、短歌、川柳を掲載している。俳句は投句を受け付けるほか、「ホトトギス」の入選句を紹介しているが、和歌は一門の中で開

⁴⁷ 10 月 21 日に御題が発表されていたときは無署名「朝雪 歌会始の御題」（「朝日新聞」昭 23・10・21）、無署名「若草 歌会始の御題」（「朝日新聞」昭 24・10・22）では、それぞれ締め切りが十二月十日とされている。

⁴⁸ 内野光子「(4) 戦後歌会始の動向 ②一九五三年（昭和二八年）―一九五八年（昭和三年）」（前掲『短歌と天皇制』、190 頁。

⁴⁹ 無署名「預選者が参内 在留邦人も詠進す」（「時事通信」昭 23・1・30）

催される毎月の歌会での作品が掲載されているようだ⁵⁰。その他、日本の独立や秩父宮の逝去など、何か特別なことが起きた際も、歌が掲載されている。さらに毎年11月になると「新年文芸」⁵¹として、和歌、俳句、川柳はもちろん、論文、小説、詩、随筆が懸賞付きで募集された。選ばれた作品は元旦の「新年附録」で発表、それとは別の「附録」ではない「羅府新報」本体に、御題で詠まれた和歌が掲載されている。

今回は昭和20年代のみの調査であったが、少なくとも当時の「羅府新報」の読者にとっては、「御題で和歌を詠む」という歌会始の文化が認知されていたと言えるだろう。

米国の日本人移民の入選は大きく報じられた。23年は「光栄！！田名ともゑさん 詠進歌みごと入選」との見出しで、同氏が北海道の出身で、女学校で和歌を学んだこと、渡米まで小学校の教員をしていたことなどが伝えられている⁵²。

26年に入選した阿部さつき氏に関しては、

在米歌人4人めの人として今年の御題「朝空」に入選の光栄を得た阿部さつき（44）夫人の詠進歌は、「天つ日の照りわたりたる朝空の深きしじまにこころすみゆく」であることが明らかにされた。

この歌は生まれ故郷オレンヂ郡のピナバーグを訪れたとき、朝空のすみわたった静けさに心うたれた実感を謳ったものだと言われ、入選の報に感激の表情で阿部夫人は次のように語った。

「まったく初耳です。夢ではないかとまだ信じられません。今回の光栄をえたことはこん日まで怠けがちの私を鞭うって指導して下さい高柳先生のお陰だとおもい感謝のほかはありません」⁵³

とされているため、阿部氏が2世であることが明らかである。「高柳先生」とは「羅府新

⁵⁰ 俳句は「羅新俳壇」として櫻井銀鳥が選者となり、和歌は「羅新文化」として「^加南東津久仁歌会詠草」が掲載されている（「羅府新報」昭23・1・27）。その下には「^{一月度}川原宅」とあることから、一般読者に募集するというより、後述する高柳門下の歌会で詠まれた短歌だと考えられる。

⁵¹ 「新年文芸募集 締切十一月卅日」（「羅府新報」昭23・11・19）という形で、複数回掲載されている。

⁵² 無署名「光栄！！田名ともゑさん 詠進歌みごと入選」（「羅府新報」昭24・2・1）

⁵³ 無署名「夢ではないか？光栄の入選に感激しつつ 阿部夫人謙遜して語る 歌会始」（「羅府新報」昭26・1・31）

報」の新年文芸などで選者を務めていた高柳沙水氏であろう。つまり 2 世が、文語体で和歌を詠む術を身につけられるような指導が行われていたのが明らかなのである。

米国における日本人移民と和歌文芸との関わりについては、ブラジル移民との比較も視野に、さらに調査を重ね分析する必要があると言えよう。

IV 御題「船出」に詠まれた「移民」

先述のように、28 年も、米国に移民した日本人の和歌が選歌となった。宮内庁宮内公文書館には、当然ながら「公文書」が所蔵されているため、御題の由来や、詠進歌から入選歌が選考される背景を明らかにする資料は保管されていない。しかし 28 年のみ、「歌会始録」の都道府県別詠進数の資料の次に、番号が付された歌 265 首（図 2-1、2-2）と、歌の横に「吉」や「窪」など記入された 113 首（図 3-1、3-2）を記した文書が綴じられていた。28 年の「歌会始」は、は吉井勇、尾上八郎、土屋文明、窪田通治、折口信夫が選者を務めており、113 首がそれぞれが選んだ和歌を示しているのは間違いないだろう。選者の名前が記入された 113 首の文書には、選歌となった 15 首の上に「○」が付されている。選考の過程を明らかにする大変貴重な資料であり、選歌 15 首だけではなく、詠進歌 5762 首からの 265 首、さらにその中から選ばれた 113 首を確認できることは、「天声人語」で熱望された「民衆のうたごえ」⁵⁴を知る手がかりになるだろう。

昭和 28 年の歌会始で選歌となった米国の日本人移民の和歌は、日本への「郷愁」が主題となっている。本稿では便宜上、和歌に番号を付したい。

① 船出して三十年あまりをアメリカに国を思はぬ日とてなかりき

移民の歌だけではなく、先述のように、昭和 27 年に国策による南米への移民が復活していることから、選歌の 15 首には移民を送り出す立場の歌も含まれた。

② 移民船にうつりゆく君はふるさとのひとくれの土を腰にさげたり

②には、移民として船出する本人の直接的な感情は表現されていない。だがそもそも「ふ

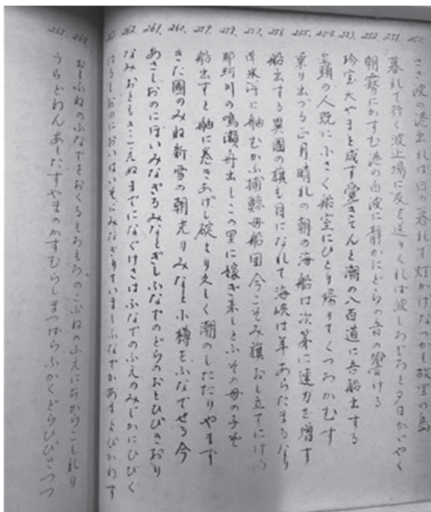
⁵⁴ 注 26 に同じ。

るさとの土」を持っていくこと自体が、後に「郷愁」が迫りくることへの情緒的な備えである。

では他の詠進歌ではどのように「船出」が詠まれているのであろうか。選者に見せる前段階と考えられる 265 首の歌から確認したい。①の詠進歌と同じ、アメリカの日本人移民の歌と考えられるのは

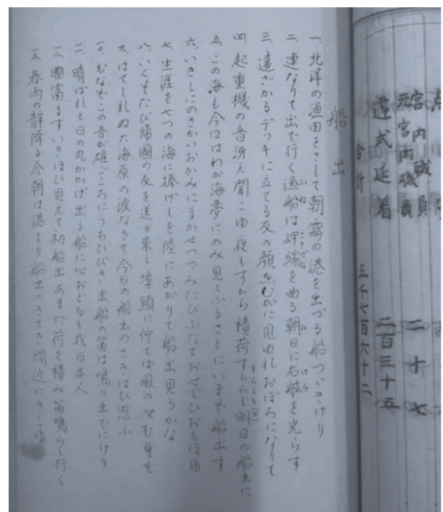
- ③ この海も今日はわが海夢にのみ見しふるさとにいまぞ船出す
- ④ 三十年の郷愁いよいよ高まりてシャートル港を今朝船出する
- ⑤ 金門湾出でていちづに西指せる汽船あれば思ふ遠き日本を

の 3 首である。当時の日本では、一般の国民の海外への渡航は禁じられていたが、逆に移民として海外に渡った人々の「帰国」は許可されており、「羅府新報」も「秋の故国第二回 観光団 団員募集」と帰国をかねた日本旅行の広告を掲載している⁵⁵。⑤のみ「遠き」米国での郷愁が詠まれているが、他は、日本に帰国するための「船出」が主題となっている。戦争中は途絶えていた祖国との往来が可能になったという、〈時代〉が表れているのだ。



〔図 2-1〕 昭和 28 年の歌会始の詠進歌から 265 首を記した文書

（宮内庁宮内公文書館所蔵「自昭和 28 年至昭和 30 年歌会始録」）



〔図 2-2〕 265 首の歌を記した文書の最終頁（「同左」）

⁵⁵ 「秋の故国第二回 観光団 団員募集」（「羅府新報」広告、昭 27・4・16）では、東京、日光、箱根、熱海、富士五湖、名古屋、京都、奈良を 10 日で巡るアジア旅行案内社の広告が掲載されている。

だが、③④のような「ふるさと」訪問への高まる想いを表した歌ではなく、米国で抱く郷愁を詠んだ歌が選歌となったことは、さらに分析しなくてはならないだろう。

また移民船が詠まれた歌としては

- ⑥ 移民団たのしき村をつくらんとなみにきほひて横浜をたつ
- ⑦ うつりすむ民団の船あさ風ぎの海をはる／＼と今出んとす
- ⑧ 海の外に希望抱きし人乗せて出づる汽船に朝日かがよふ
- ⑨ とほつくににすまるをもとめてをゝしくもわがはらかはけふふなでしぬ

の 4 首が挙げられる。旅立ちを言祝ぐ意味合いもあったと考えられるが、⑥「たのしき」、⑧「希望」、⑨「をゝしく」との語には、まさに新天地、新生活への明るい希望が感じられる。

その「移民」の目的地「ブラジル」が詠まれた歌は 6 首であった。

- ⑩ よき農となれよ君たち選ばれてけふブラジルに船出するなり
- ⑪ ブラジルの土ひらくへく船出する友をおくりぬ春めくうみに
- ⑫ ちちははを遠きブラジルにもとめつつ君が発ちゆく船の大笛
- ⑬ ブラジルに渡る男の子や船出すと父母起きてあはれ男の子は
- ⑭ 働けば食へる国ぞとブラジルへ友朗らかに船出せしかと

⑩⑪は、開拓し農業をすることが移民の象徴かつ成功であったことを感じさせる。⑫は何らかの事情で家族を失った人が新しいつながりを求める気持ち、⑬は当時の日本の生活から脱出することによって、よりよい生活をつかみ取る気持ちが表れている。

以上、「移民船」や「ブラジル」を詠んだ歌には、いずれも移民として船出する人々の「選ばれし者」としての誇りや「希望」が看取できる。当時の人々が「移民」に対して、「『船出』をして、新天地に活躍の場を求めていく人々」という印象を抱いていたからであろう。

最も直接的に「時代」を表している歌の 1 首が、国策移民の復活をそのまま表現した⑮と言える。

- ⑮ たえし道また開かれてブラジルへいく年ふりか今日の船出は

「道ひらかれて」という表現には、移民の復活のみではなく、海外への道が復活したという日本の「独立」への想いもあるのだろうか。

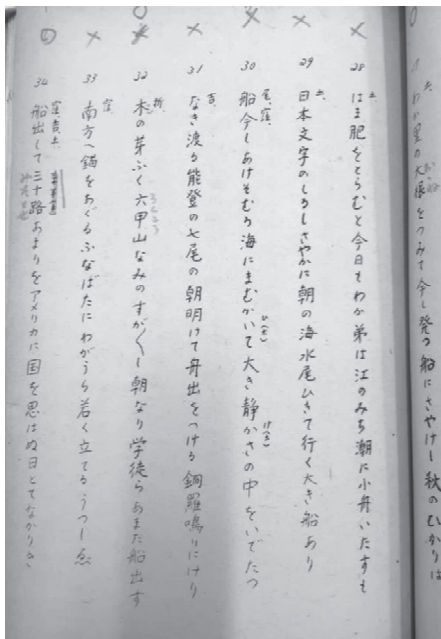
また移民という語は直接表れないものの、移民を詠んだ可能性が考えられる歌は以下の通りである。

- ⑩ 日本の山すでに見えなくなりしかばわれ等は船室に下りてゆきぬ
- ⑪ 故里の山に響きて銚する出船の汽笛を何時か忘れん
- ⑫ ふるさとの花をここにも活けにけり万里の旅をゆく船のため
- ⑬ こころなき煙にふねはかくされてあこはいてゆく本牧のうみ
- ⑭ ふたたびわか見ざらむ日本のいまは水尾あととほくかすみゆくにや

これまでの移民やブラジルを詠んだ明るく希望のある歌とは一転し、⑩⑪⑫の3首は、「日本の山」「故里の山」「ふるさとの花」など、郷愁の象徴となるふるさとの事物が詠まれている。⑩⑪は、旅立つ立場の想いを表現しているが、「ふるさとの土」を持ちゆく移民を詠んだ選歌同様、既に「郷愁」があふれた和歌である。

265首は、恐らく選者5人に渡され、選者はそれぞれ歌を選んで提出した。その結果をとりまとめたのが113首を記した図3-1、3-2の文書であろう。図3の写真が示すように、歌の横に名前が付されており、4人の名があるのは1首、3人は4首、2人は29首、他の79首は1人のみである。3人の名がある中の1首は選ばれておらず、1人しか記されていないものも選歌に入っているため、多数決ではなく、選者全員で再度吟味しなおして選んでいたのが分かる。選歌となったアメリカの日本人移民の歌は「窪、吉、土」と3人に選ばれ、②の移民船の歌は、吉井1人のみであった。

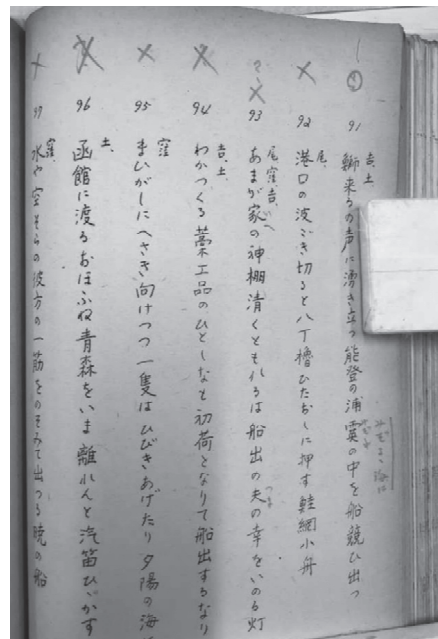
興味深いのは、図3-2のように、この段階で添削されて、選歌になった歌があることだ。「雲の中を」の横に鉛筆書きで「みぞるる海に」とあり、実際に選歌には、この添削が反映されている。



〔図 3-1〕 265 首からの選考と考えられる文書

選歌には○が付されている。

(宮内庁宮内公文書館所蔵「自昭和 28 年至昭和 30 年
歌会始録」)



〔図 3-2〕 同左

右端の 91 番に添削のあとがある。

(「同左」)

先の 20 首から 113 首に選ばれた歌と選者は、表 2 の通りである。

表を確認すると、吉井や折口が「ブラジル」や「アメリカ」、また「移民」を表現した歌を積極的に評価し、逆に窪田、尾上は 1 首も選んでいないのが分かる。

今回は特に国策移民が開始した年という点から時代性を表す歌として、また紙幅の関係で「ブラジル」や「アメリカ」、また「移民」を表現した歌だけに触れたが、113 首には、ブラジル以外の地名や、事物、また漁船も多く詠まれている。窪田や尾上が選んだ和歌も含め、総合的に分析する必要があるだろう。

〔表 2〕 和歌と選者

和歌	選者
①「船出して」	窪田、吉井、土屋
②「移民船に」	吉井
③「この海も」	折口
⑤「金門湾」	吉井、折口
⑭「ちははを」	吉井
⑭「働けば」	吉井、土屋
⑯「日本の山」	吉井
⑰「故里の」	折口
⑳「ふたたひ」	土屋

V おわりに

ロサンゼルス発行の邦字紙「羅府新報」で、御題「船出」を「独立」とあわせて報じた記事があるのは先に述べた通りであるが、その直ぐ横には「明年の英女王戴冠式に皇太子様ご参列か」⁵⁶という見出しの記事がある。実は日本が独立に供えての最終段階にあった27年2月、英国のジョージ6世が逝去し、エリザベス女王が即位した。英国王室と日本の皇室には長い交流の歴史があったものの、昭和16年から国交が断絶し、例えば王や天皇の誕生日に祝辞を送ることも非公式で行われていた。日本が独立し、10年ぶりに国交が正常化した年の若い女王の即位は、いわゆる皇室外交に新しい風を感じさせたと考えられる。

先の27年6月6日付「毎日新聞」の1面には、

松本駐英大使は6日午前6時羽田発のBOAC機でロンドンに向け赴任の途につくが、同大使は終戦後の初代大使として過去11年間にわたり戦争状態を続けた両国関係を昔の日英同盟時代の親密関係に戻すべく政治、経済上の関係改善に努力するはずである。同大使の使命の1つとして来年6月2日ロンドンのウェストミンスター寺院で举行されるエリザベス女王の戴冠式に皇太子明仁殿下が天皇陛下の御名代としてご参列されることになるかもしれず、その下準備を英皇室並びに政府当局と打ち合わせる使命を帯びていると言われる。

(略) 来年の御訪英予定は御留学と関係なく、エリザベス女王の戴冠式には各国の元首あるいは首相が参列し、世紀の盛儀が予想されているので、独立日本としても米国とともに最友好国の1つである英国に対しては若き日本のホープである皇太子殿下が代表として参列されることが最もふさわしいとされ、英皇室栄当局でも松本大使が赴任してからの話し合いに好意と歓迎の意を表されるのではないかと思われる⁵⁷。

しかし、2ヶ月半後、同じ「毎日新聞」に「列席中止か」⁵⁸との記事が掲載されている。実際に英国のデニング大使が英国王室からの皇太子の差違要請を伝えたのは27年9月7日であり、「政府が皇太子のイギリス差違を閣議決定」したのは、11月7日であった⁵⁹。

⁵⁶ 無署名「明年の英女王戴冠式に皇太子様ご参列か」(「羅府新報」昭27・6・9)

⁵⁷ 無署名「戴冠式参列のため皇太子殿下御訪英か 松本大使が準備打合せ」(「毎日新聞」昭27・6・6)

⁵⁸ 無署名「皇太子殿下 英女王戴冠式に列席中止か」(「毎日新聞」昭27・8・22)

⁵⁹ 波多野勝「第五章 イギリスの対日外交攻勢」(『明仁皇太子 エリザベス女王戴冠式列席記』平24・6・4、草思社)、124頁。

発表は 9 日、翌 10 日が「立太子の礼」であることから、マスコミ各紙は、先の記事同様、英女王の戴冠式に皇太子が列席することで、〈独立〉した新しい日本を世界にアピールできると望む内容記事が多くあった⁶⁰。

皇太子の差違までの過程や、実際の半年にも及ぶ各国訪問については波多野勝氏の『明仁皇太子 エリザベス女王戴冠式列席記』に詳しいが、その中に以下の記述がある。

交通手段について、吉田首相の意向を伝える松井明参事官（外務省）は飛行機を考えていたが、1952 年 12 月 29 日、田島長官は「之れは理屈なしにきめて、すなわち首相に折れてもらう」国事といっても「陛下の御子様の事ゆえ、陛下のご安心のゆく方がよろしい」として船の使用を要請し、結局首相は折れた。これで往路は客船使用が決まったのである⁶¹。

皇太子が日本を出発したのは 3 月 30 日であった。独立国家としての日本から、「若きホープ」⁶²として英女王の戴冠式に列席し、諸国を歴訪する直前、初めて参加した歌会始で皇太子が御題「船出」で詠んだのが次の歌である。

荒磯のうなばらこえて船出せむ広く見まほらむとつくにのさま

歌会始の日の「朝日新聞（夕刊）」には

今年は独立国となって初めての歌会始であるとともに、皇太子さまの御訪英を前にしたものであるだけに、御題『船出』は皇室と国民の喜びをこめて詠いあげられた⁶³。

との記事が掲載された。

先述のように、御歌所の腐敗を摘発する記事を連載し、その廃止後に民衆のうたごえがひびくことを「歌会始」に期待した「朝日新聞」が、この記事を書いた意味は小さくないだろう。

⁶⁰ 注 48 で、波多野氏も同様の指摘をしている。

⁶¹ 注 48 に同じ。

⁶² 注 46 に同じ。

⁶³ 無署名「“海原越え船出せむ” きょう『歌会始の儀』 皇太子さまも一首」（「朝日新聞」昭 28・2・5）

これまで、歌会始の詠進歌から、歌を寄せた一般の人々の想いや時代性を読み取ろうという研究はほとんど進められてこなかった。しかし、28年は、御題「船出」に日本の独立を想起し、国策移民として旅立つ人を言祝ぐ時代性が表れていた。また、戦後進められた歌会始の改革により、「国民の喜び」がこめられた⁶⁴歌会始としても捉えられている。

今後は選考の過程を明らかにする資料をさらに分析し、外国に関する歌だけではなく、他の事物を詠んだ和歌も含めて、複合的な視点で昭和 28 年をとらえるための考察を深めていきたい。

(同志社大学日本語・日本文化教育センター)

⁶⁴ 注 63 に同じ。